



見事

「よっ、お見事！」

と、となりの太ったおじさんが言った。そのおじさんは、数分前に出会ったばかりで、名前も、どんなところで働いているのかも、趣味趣向も何も知らなかった。そのおじさんだけじゃない。目の前に座っている髪の長い女性も、その隣のみつあみの女の子も、そのまたとなりの男子高校生も、僕にはまったくの他人と言ってもいいようなものだった。しかし、ここに、わずか1メートル四方のテーブルを囲んで、僕たちは、なにかとてつもなく深い絆を、もっているようだった。

数分前、僕は砂利道を歩いていた。今時砂利道なんて珍しいな。と思いながら歩いていた。足の裏は、妙に痛くて、底の薄いボロボロのスニーカーを履いていたことを悔やんだ。

どうしてこんなに痛いのか、その正体を見るべく、僕は下を向きながら歩いた。

そして気づいたのだ。そのマッチに。

一本のマッチが、大きな石ころの隙間に、丁寧に置かれていた。落としたのではないと感じたのは、それがまだ使っていないマッチだったからで、それに、なんだかそんな気がしたからだった。

「マッチも、最近見ないな〜」妙な懐かしさを覚えて、僕はそれを拾った。その瞬間だった。

「はい、こちらへどうぞ〜」

「え？」

僕が顔を上げると、目の前に、小さな白い建物が建っていた。

そしてその横には、ピエロのような恰好をした変な人が立っていた。みるからに怪しげだ。

「さ、こちらへどうぞ〜」

しきりに手を突如現れたこれまた怪しげな建物のほうへのぼして、僕を誘導しようとしている。

「あ、あの〜、いいです。急いでるんで」

「そんなこと言わず、これを見逃したら、あなた一生、いや、死んでからも後悔しますよ」

「そんなのには騙されませんよ」

「でも、せっかくチケットを持っているのにあなたは。これは何万分の一のチャンスを手にした人にしか見られないんですよ」

「チケット？」

「はい、それです。今手にお持ちの」

「え、これ？」

「はい、さようです」

僕は手の中のマッチ棒を見た。こんなの拾わなければよかった。そうすれば、こんな変な勧誘に声をかけられることもなかったのに。

「あ、こんなのだれかに譲ります」

「ええ！いいんですか？絶対に見るべきだと思いますけどねえ、私は」

「それでは、そのチケットは私にお譲りいただくということで。」

「え、あなたに？」

「はい、さようです」

「やっぱりちょっと見てみようかな」

「そうですね、そうですねとも。絶対にその方がいいですよ」

僕はおそろおそろ促されるまま、その白い建物の扉に手をかけた。

ドアノブがひんやりと冷たかった。

扉から入ると、一人のおじさんが立っていた。これが、後に「よっ、お見事！」と叫ぶおじさんである。おじさんは、右手でマッチ棒を一本つまんでいた。

「なんだってこんなところに、あれ、君もマッチ持っているの？」おじさんは気さくに話しかけてきた。

「はあ」

「さっき砂利道を歩いてたら、これが落ちてて、なんだか懐かしくて拾っちゃいました。

「そう、じつは俺もね、さっき道で拾ったのよ。まだ使ってないからもったいないと思ってさあ」

「それ、砂利道でしたか？」

「いや。普通のコンクリだな」

僕は部屋の中を見回してみた。白い壁に白い天井。そして扉は、自分が入って来た扉だけだった。

「変だな……」

僕は思わず壁に手をついた。何がなんだかわけがわからない。白い壁は、すこしざらざらしていた。

その時、キィと音がして、長い髪の女が入って来た。

「あの、ここ、なんなんでしょう？」

入ってくるなり、不安そうに女の人が聞いて来た。

「いやー、僕たちもよくわからなくて」

それを言うか言わないかのところで、僕はその女の人もマッチを持っていることに気づいた。

「それ、どこで拾ったんですか？」と僕はすかさず聞いた。

「あ、拾ったってわかっちゃいます？今海にいたんですけど、砂の中に埋もれてるのを見つけて

。綺麗な砂浜だったから、ごみが落ちてちゃいけないと思って拾ったんですけど」

「砂浜からここに来たんですか？」

「はい」

僕がいた砂利道のある場所は、内陸で、海へ行くには車で一時間も走らなければならなかった。

なんなんだここは

僕はなんだか怖くなってきた。帰ろう。

僕は扉へ向かって走った。すると、バンッと向こうから扉が開いて、そこからみつあみの女の子が元気よく出て来た。

やはり、手にはマッチを持っている。

「すごいものってなに？」

女の子は、興味津々の目で、僕を見て聞いた。

「それはこれから始まるみたい。それより君、どこから来たの？」

「うーん、わかんない」

「わかんない？」

まあ、五才くらいだから無理もないかと僕は思った。

「これ、何かわかる？」

と、女の子はマッチを差し出して聞いた。

「マッチも知らないのか？」とおじさんが言った。

「知らない。見たことない」と女の子が言った。

「そうか、これはな……」とおじさんが説明に入ったところで、扉から男子高校生が入って来た。

「あなたは、どこでそれを拾ったの？」と髪の長い女の人が聞いた。

「学校の帰り道に、ふと見つけて。これ、マッチですよ。絵本で見たことある」

「まあ、正解だな」とおじさんが言った。

その時、上の方から声が聞こえた。

「みなさ〜ん、おそろいですね！それでは、これから、キャンプファイヤーを始めます。皆さん、楽しんでくださいね〜」

「キャンプファイヤーだって？」

おじさんが息巻いた。

「こんな室内で、やれるわけねえじゃねえかよ。俺は帰る！」

大股でおじさんは歩いて、外へ出ようとした。しかし、そこにはもう扉はなかった。

おじさんは青い顔で振り向いた。

そこには、なくなった扉の代わりに、白いテーブルが現れていた。

僕もびっくりした。おじさんを目で追っているうちに、瞬時に音もなく、そのテーブルは現れたのだった。

「まず、キャンプファイヤーしてみましょー」落ち着いた声で、髪の長い女の人が出た。

「これが出て来たってことは、ここでやれってことなんじゃないかしら」

「そうですね。なんだか燃えない素材みたいだし」僕はもうどうにでもなれという感じで、冷たいテーブルをコンコンと叩いた。

「どうやってやるのー？」とみつあみの女の子が聞いた。

「うーん」と、みんなは一瞬考え込んだ。

「あ、これですよ、これ」男子高校生が、自分のマッチを指さして言った。

「マッチ？」と僕は言った。

「これを薪の代わりにして、燃やせばいいんじゃないですか？」

「なるほど」と僕は言った。

「はんっ、ずいぶんちっせえキャンプファイヤーだな」とおじさんが言った。

「やろー、やろー、キャンプハイヤー」

「キャンプハイヤーじゃねえ、ファイヤーだファイヤー」

そして僕たちは、白いテーブルの周りに集まり、一本ずつ自分のマッチを置いていった。

まず、おじさんが一本のマッチを置き、そのマッチに平行になるように僕のマッチを置いた。そして今度はそのマッチの上に、垂直になるように、長い髪の女の人のマッチが置かれた。そしてそれに平行になるように、みつあみの女の子のマッチが置かれた。そしてその上に、僕のマッチの真上に来るように、男子高校生のマッチが置かれた。

「よし、これでできた。あとは、これに火をつけるだけです。ライターか何か持ってる方いますか？」と男子高校生が言った。

「今度は不正解だな」とおじさんが言った。

「マッチはな、火をつけるための道具なのよ。火をつける道具に火をつける道具探してどうすんだよ」

「あ、そうでした」

おじさんは、男子高校生が最後に置いたマッチを手にとると、白い壁にさっと擦って、マッチに火をつけた。そして、僕らのキャンプファイヤーに火をつけた。

ポツと、おじさんは全てのマッチに火をつけて、最後に手持ちのマッチを真ん中に投げ入れた。そしてマッチはめらめらと燃え始めた。こんなオレンジ色の火を見たのは、久しぶりだった。そのオレンジが、木枠の中で、だんだん塊になって来た。五本のマッチだけで、こんなに長い時

間燃え続けるだろうかと僕は思いながら見つめ続けた。

塊はだんだん大きくなり、手のこぶし大位になった。

そして突然、ひゅーと音がして、白い天井をぶち抜き、その塊は飛び出していった。

「よっ、お見事！」と、ここでおじさんが言った。

天井からオレンジの塊が出て行ったあと、僕たちはぼーっと穴の開いた天井と、黒くくすぶっている五本のマッチを見ていた。

「ありがとうございます。これにて、キャンプファイヤーをお開きにしたいと思います。皆さまお気をつけておかえりください。また、お帰りの際には、入って来た順から、お一人ずつ退室願います。それでないと、お家に帰れなくなりますよ～」

おじさんが、扉へ向かった。いつのまにか、また扉ができていた。おじさんは、最後に振り向いて、「じゃあな」と言った。「また」と僕は言った。

そして次は僕の番だった。なんだか名残惜しい気もしたけれど、さっぱりした気もしていた。

「それじゃ、さようなら」

「ばいばーい」と、女の子が手を振ってくれた。

ばたんと扉が閉まった。後のことは知らない。

空は、オレンジ色の夕焼けだった。その時僕は気づいた。

あ、僕たちは、夕日の色を作ったんだ。

帰り道は、夕日に見とれて、足の痛みどころじゃなかった。

終わり

【2017-07-17】 指さし小説 第16話

<http://p.booklog.jp/book/116028>

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

配信が遅くなってすみません！今回のテーマは、「見事」でした。なんだか前向きなテーマなので初めはとまどいでしたが、なぜかキャンプファイヤーのイメージが浮かんできて、それからは、すらすらとできました。マッチも、キャンプファイヤーも、砂利道も、最近みかけなくなってきています。なんだか懐かしかったです。

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/116028>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト